

# OKADA-ROOM Vol.6

日本近代洋画の秘められた佳品たち

会期 2016年9月2日(金)~12月25日(日)

普段は人気作の陰に隠れて登場機会が多くないものの、キラッと光るものを秘めている。佐賀県立美術館では、そんな日本近代洋画の佳品を数多く収蔵しています。

OKADA-ROOMのVol.6展示となる今回は、出品作の17点中13点がOKADA-ROOMに初登場します。

岡田三郎助によって涼やかな色彩で描かれたフレスコ画《坐婦》、青木繁作の肖像画《木下秀康大尉像》、岡田に師事をしたこともある夭折の画家・佐伯祐三の名品《八百屋》など、館蔵の秘められた作品たちを、岡田三郎助の名品《矢調べ》や《花野》（ともに佐賀県重要文化財）とともに楽しみください。

## 出品目録

No.	作品名・資料名	英訳	作者名	制作年	寸法（本紙・cm）	材質	所蔵
1	なかの たつ 中野多津像	Portrait of Tatsu Nakano, Okada's Cousin	岡田三郎助	1893（明治26）頃	85.0×54.8	油彩・カンヴァス	個人蔵

### 若き岡田の修業時代の労作

長崎県・神奈川県なかの たけあきの知事を務めた叔父、中野健明の娘を描いた作品。健明は洋画家を志していた若き岡田の良き相談相手であり、彼の家族もまた岡田と親しく付き合ったと考えられる。当時の岡田は画塾で修業中であり、暗緑色の背景に鮮やかな赤い着物が引き立つ画面には筆運びの生硬さが見られるものの、澄ました中にあどけなさの残る少女を縁者ならではの親しみをもって誠実に描き出している。

2	老人像	Old Man	岡田三郎助	1901（明治34）	65.3×48.5	油彩・カンヴァス	館蔵
---	-----	---------	-------	------------	-----------	----------	----

### 滞欧中に描かれた人物画

岡田33歳、フランス留学の最後の年に描かれた作品。老夫の髪やひげのふさふさとした感じ、柔らかくたるんだ肌の感じなど、質感表現が見事だ。

淡い褐色で統一された画面は、同じ色調のなかで質感や奥行きを描き分けようとする岡田の挑戦心の表れかもしれない。

3	天井画下絵	Study of a Ceilling Painting	岡田三郎助	1906（明治39）	55.4×36.5	油彩・カンヴァス	館蔵
---	-------	------------------------------	-------	------------	-----------	----------	----

### 華麗な天井画の構想画

岡田は、東宮御所（現在の迎賓館赤坂離宮）の客室や個人の邸宅など、西洋風の天井画の制作に度々関わった。本作はそのような天井画の下図のひとつと考えられる。中央の青空を縁取るように配された植物は、岡田が特に好んだバラである。東京美術学校の図案（デザイン）科で教えるなど、装飾やデザインの分野に関心が深かった岡田にとって、天井画制作は創作意欲を刺激したに違いない。

**岡田の実験精神が感じられる一作**

フレスコとは、乾いていない漆喰の上から水性の顔料で着色する技法である。岡田は岩絵具やパステルなど、さまざまな画材を研究して制作に活かしたことが知られるが、フレスコ画の作例は非常に珍しい。

本作は1919 (大正8) 年に描かれた《化粧》という油彩作品の再制作であることが分かっており、岡田が異なる技法で同じ主題に挑戦していたことがわかる。桃色と淡青色の軽やかな色調が涼しげである。

**小首をかしげた可憐な少女**

カンヴァスの中からこちらをまっすぐに見つめる少女。髪と着物の輪郭はぼかされ、画面中央の少女の顔に視線が誘導されるように工夫されている。かしげた首やわずかに口角の上上がった唇、瞳の中に描き入れられた光が、表情を生き活きと際立たせ、作品全体の甘い魅力を引き立たせている。

当初は《習作(少女)》というタイトルであり、1907 (明治40) 年の第11回白馬会展に出品された。

**洋画家への一步を刻んだ卒業制作**

堀江正章ほりえ まさあきが主宰する画塾「大幸館たいこうかん」の卒業制作として描かれた、岡田25歳の頃の作品。まだ旧来の暗い色遣いが画面を支配してはいるが、老人の腰あたりの陰影のつけ方に、師から学んだ色の配置の工夫がみられる。のちに岡田は、堀江のもとで初めて本格的な色彩の表現を学び、これが後に黒田清輝らのもたらした新しい画風を理解するのに役立った、と回想している。

**師ラファエル・コランへのオマージュ**

岡田は生前から、ラファエル・コランに師事した日本人画家の中でもその作風を最もよく受け継いだ画家と評されていた。本作はコラン没後の翌年に描かれたもので、草上に横たわる裸婦を描いたコランの作品《花月(フロリアル)》(パリ・アラス美術館蔵)などが連想される。本作は岡田にとって師コランへ捧げるオマージュであったのかもしれない。第11回文部省美術展覧会に出品。

**コンテで描かれた伏し目の裸婦**

コンテ(顔料を固めて作られた画材、パステルやクレヨンクレヨンの仲間)で描かれたデッサンである。ほほや顎、肩から腕にかけての曲線が美しい。恥じらうようにうつむく女性の表情はたおやかで、優美、典雅と呼ばれる“岡田の美人画”の特徴をよく表している。習作の域を越えた魅力を湛える珠玉の一作。

**明治油画の雰囲気の色濃く宿す、謎多き作品**

百武家に伝来した作品で、百武兼行筆である旨の裏書が確認できるが、美術史家の副島三喜男氏は本作を高橋由一の作と推定している。しかしいづれにせよ、細部まで行き届いた描きぶりはこの画家の描写力の高さをよく示す。街道を往き来する人々がいきいきと描かれており、当時の暮らしを垣間見ることができる点も興味深い。

**百武兼行(ひゃくたけ・かねゆき、1842-1884)**

現在の佐賀市片田江に生まれる。1871(明治4)年から鍋島直大(第11代佐賀藩主)のヨーロッパ巡遊に随行し油彩画に出会い、ロンドン、パリ、ローマで本格的に学ぶ。本職は外交官であったが、いち早く西洋で油彩画を学んだ日本における洋画のパイオニアの一人として知られる。

岡田三郎助は幼い頃に百武の描いた油彩画を見て大きな衝撃を受けており、この経験が「子供心にも堅い決心をつけさせる重要な動機」となり、洋画家としての一生を決定づけた、と語っている。

**高橋由一(たかはし・ゆいち、1828-1894)**

佐野藩士の息子として江戸期の東京で生まれる。はじめ狩野派に学ぶが、西洋製の石版画を見てその迫真的な描写に驚嘆。以後、川上冬崖やワーグマン、フォンタネージらに教を乞い、幕末から明治にかけて日本洋画界の実質的な第一人者として活躍する。画塾を主宰したり美術館建設を建言するなど、洋画の普及や後進の育成にも力を注いだ。

一貫して写実性を追究し、対象の本質をえぐりだすような描写を行ったことで知られる。代表作は《鮭》(東京藝術大学美術館蔵)。

**荒れ狂う風が作品の主役**

絵筆を携え、各地を旅していた時期に描いた作品と考えられる。今にも嵐が来そうな空の下、農夫たちは帰路を急ぐところであろうか。背景の森は生き物のよううねり、重く立ち込めた黒雲は中央の小さい人物を包み込むように劇的に表現されている。高い描写力を持ちながら画壇と距離を置き、独自の画境を目指した五百城は、こうした自然の躍動を生涯のテーマの一つとした。

**五百城文哉(いおき・ぶんさい、1863-1906)**

水戸藩士の子として茨城県に生まれる。高橋由一、小山正太郎などに洋画を学びながら農商務省に勤めるも辞職、各地を旅しながら風景などを描く生活に入る。後年は栃木県日光市に居を構え、創作活動に励む。その作品は日光を訪れた外国人観光客にとっても人気があったといわれる。

自宅にロック・ガーデンを作るほどの植物好きで、美しい植物画を多く残した。弟子に小杉放菴(未醒)がいる。

### ざらりとした絵肌がパリの空気を伝える

パリに住んで2年目の作品。この年の秋にはサロン・ドートンヌへの入賞も果たしており、佐伯はヴラマンクやユトリロの作風を消化し、独自の表現を確立しつつあった。

鈍く沈んだ色調の中で、店のファサードの青緑色と、女性の服の朱色が目を惹く。壁のポスターや広告文を佐伯はよく作品に描きこんでいるが、この八百屋の看板には「ブルターニュ産物品—バター、卵、塩物」と書かれている。1926(大正15)年の第13回二科展へ出品。

### 佐伯祐三 (さえき・ゆうぞう、1898-1928)

大阪府に生まれる。19歳で上京、藤島武二の川端画学校や岡田三郎助の主宰する本郷洋画研究所に学ぶ。東京美術学校を卒業した1923(大正12)年、ヨーロッパ留学へ発つ。フランスでフォーヴィスムの大家ヴラマンクを訪問し、作品を批判され画風を一転。ユトリロからも影響を受け、荒々しいタッチと重い色調でパリの街角をとらえた作品を多く描いた。心身を病み、弱冠30歳でパリで没する。

### 12 木下秀康大尉像

Portrait of  
Captain Kinoshita

青木繁

1910 (明治43)

73.3×50.2

油彩・カンヴァス

個人蔵

### 亡大尉の夫人へ捧げられた肖像画

九州へ戻った青木は、肖像画制作を請け負うことで生活費を得ていた。本作もそうした肖像画のうち的一点で、小城出身の陸軍大尉・木下秀康を描いたもの。ただし、木下大尉本人はこの時既に亡くなっており、夫人の依頼で写真をもとに制作されたようだ。青木らしい奔放な筆あとには影を潜めるが、勲章や背景などは丹念に描きこまれ、装飾への関心が伺われる。当時、青木はヨーロッパのアール・ヌーヴォーの動向に関心を寄せていた。

### 青木繁 (あおき・しげる、1882-1911)

久留米市に生まれる。洋画家の森三美もり みよしに学び東京美術学校(現在の東京藝術大学)に入学。1904(明治37)年、千葉の海岸で代表作《海の幸》(ブリヂストン美術館蔵)<sup>※1</sup>を描く。1907(明治40)年、東京勲業博覧会に《わだつみのいろこの宮》(同館蔵)<sup>※2</sup>を出品するも、三等賞という不本意な結果に終わり失意のなか帰郷。九州北部を放浪し、28歳の若さで没した。古事記を愛読し、神話に想を得た浪漫的な作品を多く描いた。

※1.2 2016年10月に石橋美術館(現・久留米市立美術館)より移管

### 13 婦人像

Portrait of a  
Woman

小代為重

昭和初頃

39.9×73.0

油彩・板

館蔵

### 丁寧に描かれた女性の表情

柔らかい光を受け、リラックスした表情を浮かべた女性。白と青のトーンで統一された画面には親和的な雰囲気が漂う。青は、白馬会派の画家たちが陰影表現などで特に好んで用いた色であり、黒田や久米から影響を受けた小代も青の表現に熟達していた。他にも《少女像》や《近江八景》(ともに当館蔵)など、青色を印象的に使った作品を残している。

### 小代為重(しょうだい・ためしげ、1861-1951)

佐賀に生まれる。旧姓は中野で、岡田三郎助の母方の遠縁にあたる。千葉師範学校の教員を務めながら、百武兼行から油彩を学び、1885(明治18)年からは工部大学で建築装飾を教える。油彩画を学ぼうと決心した少年時代の岡田にとってよき相談相手だったようで、曾山幸彦の画塾を紹介するなどの援助をしている。

明治美術会や白馬会創設に携わるなど洋画家としても活躍したが、本来は機械工学の専門家を自認しており、東京電信学校では機械製図の助教授を務めた。

14	郊外風景	Landscape of Suburb	小代為重	昭和初頃	31.9×40.9	油彩・カンヴァス	館蔵
----	------	---------------------	------	------	-----------	----------	----

#### 近所の風景を描いた愛すべき小品

当時暮らしていた東京都二子玉川の近所の風景を描いたのであろう。筆致は速く、その場の空気を感じながら描いた雰囲気がよく伝わってくる。後年は本業の機械工学に打ち込むなど、画壇からは遠ざかった小代だが、白馬会で磨いた色彩感覚と創作意欲は衰えることはなく、本作のように身の回りの風景を滋味深くとらえた佳作を残した。

15	落葉	Fallen Leaves	山口亮一	1912(大正1)	60.6×80.1	油彩・カンヴァス	館蔵
----	----	---------------	------	-----------	-----------	----------	----

#### 抑えた色味の秋の情景

静謐な画面の中で、木立や墓石の垂直線がリズムと奥行きを生んでいる。手前の地面は広くとられ、石段が視線を画面奥へと導く。木々の間から洩れる光や葉の重なりにもみられる繊細な色調に、東京美術学校で身につけた外光表現の成果がよく表れている。美術学校を首席で卒業した1年後、佐賀に帰郷した後に描かれた作品。

### 山口亮一(やまぐち・りょういち、1880-1967)

佐賀市に生まれる。東京美術学校を首席で卒業したのち、1911(明治44)年に佐賀へ帰郷。岡田三郎助、久米桂一郎らの協力を得て、佐賀美術協会創立の際には会長に就任した。1921(大正10)年から退職まで佐賀師範学校で洋画を教え、また佐賀洋画研究所などの画塾も主宰。生涯を通じて佐賀の芸術文化の発展と後進の育成に務めた。句作や陶器の絵付け、写真なども嗜む多才な人物でもあった。

16	出湯の宿	Inn with Hot Spring	山口亮一	1916(大正5)	60.5×45.7	油彩・カンヴァス	館蔵
----	------	---------------------	------	-----------	-----------	----------	----

#### 旅先の温泉宿でのひとこま

長男が生まれた翌年、保養のため嬉野温泉へ滞在した際に描かれた作品。湯上りなのか、リラックスした表情でポーズをとっているのは妻のスガ夫人だ。人物は山々を背にして逆光の色味で描かれ、陽光の眩しさと空間の広がりがよく表されている。

山口は家族と過ごすひとときを描いた作品を多く残しており、本作も妻への愛情が感じられる佳作である。ちなみに額は山口による手作り。

### 思索に沈む江戸風の女性像

東京美術学校を卒業後、同校研究科に在籍中に描かれた作品。御厨の作品にしばしば見られる、量感のある黄褐色が用いられている。

本作の6年前に、師の小林萬吾が、同様に和服の女性が登場する《物思》という作品を文展に出品しており、御厨が制作にあたり師の作品からインスピレーションを得た可能性もある。

### 御厨純一（みくりや・じゅんいち、1887-1948）

佐賀市高木町に生まれる。1906(明治39)年上京、白馬会第二研究所を経て東京美術学校で学ぶ。同校の卒業生と「四十年会」などの洋画の親睦団体を立ち上げる。1926(大正15)年、フランスに留学、ヨーロッパを周遊しながら現地の風景などを描いた。戦時中は海軍従軍画家として戦争画を手掛けている。力強い線と量感豊かな描写に特色がある。

佐賀県立美術館

〒840-0041 佐賀県佐賀市城内1-15-23  
TEL. 0952-24-3947 FAX. 0952-25-7006

E-mail. hakubutsukan-bijutsukan@pref.saga.lg.jp Web. <http://saga-museum.jp/museum/>